

# 学習者による日本語使用のレポートを取り入れたコミュニケーションの授業 —学習者の気づきから得られた授業改善のヒント—

東京大学グローバル教育センター シャルマ 彩

## 実践の概要

はたらきかけ場面(依頼・許可求め・誘い等)の観察と練習

①事前の授業

②(通称)  
アクションレポート

③事後の授業

教室外での発話を記録

検証・フィードバック

学習者：大学院レベルの留学生  
学習の目的：主に日常生活での使用、日本語への関心  
期間：12回/1セメスター  
内容：リクエスト表現の選択、理由の伝え方、**会話の切り出し** (本発表の対象)

## 事前の授業 (観察と練習)

切り出し例の観察

↓ 「～んですけど」とともに話し手の状況を説明し聞き手に会話に参入させる例

切り出し部分の作成

【研究室で同僚に日本語のチェックを頼む】	【学習者による( )部分の産出例】	【教師の問いに対する学習者のコメント】	【教師によるフィードバック】
A: あの、すみません。 B: はい。 A: ( )。 B: あ、はい。 A: チェックしていただきたいんですけど。	① ○○というジャーナルのエディターに出すんですけど ② これ、2回目なんですけど ③ C先生にメールを書いたんですけど ④ 私のメールなんですけど ⑤ 私は外国人で、これを書いたんですけど	① 自分にとって重要な点を先に伝えた ② 困っていることを伝えた ③ 聞き手とC先生との関係は考慮しなかった ④ — ⑤ 日本語に自信がないことを伝えたかった	話し手と聞き手で共有されている文脈が不十分 (聞き手の適任者性が薄い) 話し手と聞き手で既に共有されている情報しかない (新規情報がない)

発話時に聞き手が何を知っているか／知らないかを踏まえて、聞き手にとって必要な情報を伝えることで会話を切り出す

## アクションレポートの例

学習者A (中国)	聞き手	サークルのリーダー
	状況	合唱サークルに入り、初めて練習に参加したが、楽譜を持っていなかった。
	意図	自分がどうして楽譜を持っていないのか、説明する必要があると感じた。
	使用フレーズ	「初めてなんですけど、楽譜は…」
	聞き手の反応	他のメンバーの楽譜を私に貸してくれた。
内省・疑問	—	

学習者B (中国)	聞き手	看護師
	状況	夜間、子供が急病になって、病院の救急外来に電話で連絡をした。その時に夜間受付の場所を聞いたが忘れてしまい、確認のため再度電話をかけた。
	意図	数分前、連絡した状況を伝えようと思った。
	使用フレーズ	「いつもお世話になっております。先程 一度連絡した方ですけど…」
	聞き手の反応	聞き返された後、(Bが話す)日本語がわからないと言われた。
内省・疑問	「方」ではなく「者」といったほうがよかったかもしれない。	

聞き手の適任者性を踏まえて、聞き手の助力に繋がる情報で切り出す

## 事後の授業 (フィードバック)

【学習者同士による話し合いでのコメント】

(1)  
学習者C: 情報(詳細な自己紹介)を網羅的に言うか  
学習者D: 自己紹介は学内サークルか外部の人もいるかによる  
学習者E: 練習前の場面なのでミニマムな情報だけ言えばいい  
学習者F: 会話が続いたら言う機会があるかもしれない  
学習者E: 聞き手にとって新しい情報は話し手が初参加という点

学習者H: ミニマムな文で本当に伝わるのか  
学習者G: この状況なら十分伝わる  
学習者H: リクエストに関りの薄いことや既知情報を言われることは聞き手にとって負担になる

(2)  
学習者G: 大きい病院だったら他にも電話がかかってきていたかもしれないので、情報を追加したほうがいい  
例「さっき電話した熱があるの子の親なんですけど」

発話時の状況(聞き手と共有されている文脈)が再現された

話し手の立場に立って、適切な切り出しを考えるうえで必要な文脈の要素に目を向けた

## 授業にアクションレポートを取り入れる意義

談話の展開における着眼点を知る  
限界点：発話の文脈への意識

①事前の授業(観察・練習)

②アクションレポート

③事後の授業(検証・フィードバック)

発話時の状況の再現

コミュニケーションの当事者として文脈の要素に目を向ける

## 引用文献

本郷智子(2009)「学習者のレベルに対応した会話教育—実践と振り返りを繰り返す活動から学習者が学ぶこと—」『2009年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.80-81  
増田真理子(2017)「日本語教育における『んですけど』の扱い」江田すみれ・堀恵子(編)『習ったはずなのに使えない文法』pp.65-92,くろしお出版